

街の女マギー

ステイーブン・クレイン作

牧草 泉

第十章

ジミーにとつては、見知らぬ男が自分のうちにやってきて、妹を犯すなど言語道断だった。ピートがどれほど礼儀をわきまえているのか、ジミーには分からなかつた。次の日、ジミーは夜遅く仕事から戻ってきた。

彼は廊下で、一人の老婆に出会った。彼女は古びた皮でなめしたような骨ばつた顔をしていて、手にオルゴールを持っていた。彼女はジミーを見た。そうして、汚れた窓ガラス越しに漏れてくる薄暗い光の中でにやにや笑つた。老婆は薄汚れた人差し指で彼を手招きした。

「おや、ジミーだね、昨日の夜に、私が誰と出会つたと思うかね？ あんな変な奴を見たことはないよ」

彼女は喚くように言う傍に寄ってきた。そうして彼を横目で問いかけるように見つめた。老婆は少し間をおくと興奮気味に身を震わせて話をつづけた。

「昨日の夜のことだよ、私がドアの近くにいたんだよ。するとお前さんの妹がユダヤ人の友だちと夜遅く帰ってきたんだよ。うん、とても遅くにね。そうだよ、彼女と一緒に風采の悪いお兄さんが入ってきたんだよ。夜更けに、だよ。ところがだよ、あなたの妹が、胸がはち切れんばかりに泣いているんだよ。そうなんだよ。あんな異様なことつて今まで見たことがなかつたよ。彼女つてドアのところ、『私のこと好き？』つて男に問いただしてゐるんだよ。そういいながら泣き崩れていたよ。見ていてかわいそうだったね。何度も何度も繰り返していたね。あの男はそれに答えるように、『何言つてんだ、好きだよ』つてね。『好きだつて言つてゐるじゃねえか』つて」

ジミーの顔色が蒼黒くなつた。ジミーは老婆から離れると肩を落として階段を上がつた。「好きなんだつてば」と老婆は男の声を真似て彼に向かって声を張り上げた。彼女は笑つていたが、その声はあたかも付きの悪い古い師のしわがれ声のようだった。「チィッ、好きだつて言つてゐるじゃねえか」老婆はまた真似るように口に出した。

部屋には誰もいなかった。誰かが片付けたらしい。壊れた場所の一部も修繕されていた。しかし、ところどころ不十分なところがあつた。椅子二、三脚とテーブルがあつた。そのテーブルの脚は壊れかけていた。

床は今掃いたばかりのようだった。カーテンには青いリボンが飾られていた。黄色の麦の束や赤バラ模様の垂れ飾りが

炬棚の元の位置に掛けられていた。しかしそれはひどく傷んでいた。ドアの裏側にいつもは掛けてあるはずのマギーのジャケットと帽子はなかった。

ジミーは窓の傍に行くと言った窓ガラス越しに外を見た。自分が知り合った女たちにも、いかつい兄がいるのではないか、という疑問が一瞬胸をよぎった。

彼は、突然喚きだした。

「奴は俺の友人なんだぞ！俺が彼をここへ連れてきたんだ！くそつたれめ！」

彼はイライラしながら部屋を歩き回った。そう叫ぶと、さらに怒りがこみあげてきて耐えきれなくなつたように叫んだ。「あいつをたたき殺してやるんだ！絶対にやつてやるんだ！必ずぶつ殺してやるからな！」

ジミーは帽子を掴むとドアのほうに駆けて行つた。そのとき、ドアが開いて大きな体が彼を遮つた。母親だつた。

「まあ、お前つたら、血相変えて、どこへ行くんだい？」

そう言うとなら彼女が部屋に入った。ジミーはやけばちに、母親に向かつて叫んだ。

「あのね、マギーは、けがれてしまつたんだ！あいつがね、わかつたかい？」

「それって、何なのよ？」母親はいぶかしげに言つた。

「マギーが、もてあそばされたんだよ。わかるだろう？」ジミーはいらいらして言つた。

「そんなことって・・・」母親は仰天した顔で言い返した。

ジミーはぶつぶつ言いながら窓の外に目をやつた。母親は椅子に腰を下したがすぐに立ち上がると、とりみだしたようにジミーに罵声を浴びせかけた。ジミーが振り向くと、母親は部屋の真ん中でよろよろしていて、今にも倒れそうだった。母親はすさまじい形相で腕を高く振り上げると、興奮して娘のマギーに対して呪いの声を上げた。

「神よ、あの子に永遠の天罰を！あの子には街の砂利やほこり以外は恵まないでください。あの子には神のお日差しをお与えにならないで、溝の中に眠らせてください。あの子つたら、とんでもないことをして！」

「それくらいにして！」ジミーが口を出した、「さつさと寝るんだよ」

母親は悲しげな眼で天井を見た。

「ねえ、ジミー、あの子は悪魔が生んだ子なんだよ」と彼女はつぶやいた、「そうだよ、あんな出来の悪い子が我が家みたいな家族にできるって、思いもしなかつたよ。私はあの子にいつだって何時間も話をしてやつたんだよ。もし売女にもなつたら、それって地獄行きだよって言い聞かせただけだよ。必死で育てて、言い聞かせ、論じてやつた挙句が、アヒルが池に帰るみたいに、悪の道にはいつてしまつて……」

母親の眼から涙が流れ落ちた。手が震えている。

「それに隣のサディ・マックマスターが、石鹼工場で働いている男におかされたときは、私はマッグに言つてやつたんだ。もし、娘が……」

「それって、関係ないよ」とジミーが遮った。「うん、もちろん、あのサデーもいい子だったさ——でも——いいかい——要するに同じってことじゃないんだ——そうさ、マギーが違つてたつてことなんだ——そうだろう？——あいつが特別だったつてことなんだ」

ジミーはいつも思つていた。自分の妹以外なら、どいつの妹でもみんな傷ものになつても構わないんだ、と。それを今言いたかつた。彼は、がなり始めた。

「俺は妹を傷物にしたあいつをぶつ叩きのめしてやるんだ。あいつを殺してやるんだ！ あいつは、喧嘩はお手のもののようにだが、そうはさせないぞ。必ず見つけ出して思い知らせてやるんだ。あの大馬鹿鹿野郎！ 徹底してやつつけてやるぞ」

興奮したジミーは家から飛び出していった。

ジミーが部屋から出て行くと、母親は顔をあげて、両手を上げて祈るような仕草をしながら、

「あの子は悪魔の手に放りやってください！」と叫んだ。

ジミーが暗闇の廊下に出ると、そこでは近所の女たちが盛んにおしゃべりをしていた。足早に傍を通りすぎたが、女たちはジミーには目もくれなかつた。

「あの子つたらいつだつて凶々しくしてたよ」と、女がせき込んで言うのが聞こえた。

「この長屋へやってくる男に、あの子が色目を使わなかつた男はいなかつたよ。うちのアニーが、言つてたのよ。あの恥

知らずが、だね、アニーの彼氏をとろうとしたんだつて。彼氏の父親のことかと思つてたら、アニーの彼氏だつたんだつて」

「あたしが二年ほど前だつたか、言つたじゃないの」と別な女が勝ち誇つたように言つた。

「そうだよ、あれは二年以上も前だつたのかな、うちの旦那に言つたんだよ。『あのジョンソンとこの娘はまともじゃないよ』つてね。そしたら彼つて『なんだつて、くだらないこと言うな』つて言うのよ。『いらぬお世話だ』つてね。あたしは言つてやつたよ、旦那にね。『本当なんだよ』つて『あたしは本当のことみんな知つてんだよ』つて。私はまた言つてやつたよ『後になりやあ分かるだろうよ。見ててごらんよ。あんただつて分かるからつて』つて言つたのよ」

「見る目があれば、あの子がおかしいぐらいは、誰だつて分かるさね。私は、もともとあの子の素振りが気に食わなかつたよ」

ジミーは大通りで友だちにあつた。

「おい、何してんだい？」と、その男はジミーに言つた。

ジミーは叫んだ。

「あいつの足腰が立たないくらいぶちのめすんだ」

「いつたい何なんだよ？」と、友人が言つた。

「そんなことして何のご利益があるんだよ？ ポリ公にバクられるのが、落ちだぞ！ そんなことぐらい、誰だつて知つてるぞ！ 十ドルの罰金取られて終わりだ。ばかばかし

い！」

ジミーは決心していた。

「あいつは自分のことをいっばしのやくざのように思つてるらしいが、それつて考え違いであることが分かるさ」

「バカなこというなよ！」と、友人はジミーを諷めた、「そんなことしてどうなるんだよ？」

第十一章

街角にある建物のガラス窓が、街灯を反射して歩道を黄色く照らしていた。近くに一軒の酒場があり、ドアは開け放たれていた。客を呼び込むためだった。それはあたかも、通りがかりの人に、「酒でも飲んで悲しみを癒したり活気を取り戻したりしたらいかが」と客を誘い込んでいたようだった。

酒場の壁はオリブ色と青銅色の皮まがいの壁紙で覆われている。片方に見てくれのいいつるつるしたカウンターが延びている。その向こう側には大きなマホガニー類の食器棚が天井近くまで突っ立っていた。棚にはきらきら光るグラスが積み上げられている。それには今まで誰も触れていないように見えた。食器棚の正面に張り付いている鏡はそのグラスを数倍にも大きく見せていた。グラスの間には、レモンやオレンジや紙ナプキンが、幾何学模様と並べられている。

カウンターに向かいには別の小さなカウンターがあった。その上には色とりどりの皿が並べられ、ほぐされたクラッカー、燻製ハムの切り身、バラバラにしたチーズのかげら、食

酢に浮かしたピクルズ様のものが盛り立てていた。お客の汚れた手や絶えず動かす口から発散する臭いが、周囲に充満していた。

白いジャケットを着たピートはカウンターの中にいた。そうして入ってきた穏やかな一見の客に、深々と頭を下げた。一見して上客だと分かった。

「ビールを一杯」と、その男は注文した。

ピートは泡が滴り落ちるグラスをカウンターに置いた。

その時、入口の竹製のドアが壁にばたんとぶつかって大きく開いた。ジミーが友だちを連れて入って来た。二人は威勢よくカウンターの方へやって来たが、なんとなく落ち着きがなく喧嘩腰だった。彼らは霞んだ目を瞬かせながらピートを見た。

「ジンをくれ」と、ジミーは言った。

「俺もジンだ」連れのピリーが口を揃えた。

ピートはビンと二個のグラスをカウンターに滑らせた。彼は顔を背けて光沢のあるカウンターの木目をナプキンで丹念に拭いた。その表情には警戒心があらわに浮かんでいた。

ジミーとピリーはピートに目を釘付けにしたまま、当てこするように声高に言葉を交わした。

「あいつ、洒落たマスターじゃないか」ジミーはそう言つて笑つた。

「うん、全くだ」ピリーはにやりと笑つて答えた。

「奴はほんとにすてきだよ。ちよつとあの奴さんの取り澄ま

した面見てくれよ。あんまり上品なんでよ、今夜眠っているうちに、俺は二転三転しそうだな」

グラスを手にした一見の客は、少し脇へ下がって素知らぬ振りをしていた。

「そうだな、あいつ、とんだ野郎だな」

「ほら、あの粋な格好を見てみるんだよ！」

「おい！」と、ジミーが命令口調で呼んだ。ピートは口をへの字に結んでゆっくり近寄った。いかにも不機嫌そうだった。

「で、次は何にするんだ？」彼は唸るように尋ねた。

「ジンだ」と、ジミーは言った。

「ジンだ」ピリーも言った。

ピートが酒ビンとグラスを持って二人の前に立った。すると彼らはピートを嘲笑した。ピリーは陽気な気分になると浮かれた状態で、垢だらけの人差し指でピートの方を指さした。「おい、ジミー」と、ピリーはわざと尋ねた、「カウンターの中にいるあいつは一体誰なんだよ？」

「そんなこと、俺が知るはずないだろう」ジミーは答えた。

二人は声を上げて笑った。ピートはビンを叩きつけるように置くと、二人へ凄んだ顔を向けた。彼は歯をむき出しにして落ち着きなく肩をそびやかした。

「お前たちにからかわれるような俺じゃあないぜ」と、彼は言った、「その酒を飲んでとつと出て行きなよ。いざこざはご免だな」

とたんに笑いが二人の顔から消えて、屈辱の表情に変わっ

た。

「なんだつて？ お前に口きいたのは誰なんだよ？」二人は口を揃えて言った。

一見の客は思案するような眼でドアを見やった。

「おい、やめるんだ」ピートは二人に言った、「俺をそんなに簡単に見くびるなよ。その酒を飲んじまったらとつと出ていくんだ。いざこざはご免だ」

「なんだよ、うるせえな」と、ジミーはむきになって叫んだ。

「おや、よく言うじゃないか」ピリーも色をなした。

「俺たちは、時がくれば出ていくだけだ！ 判ったか！」と、ジミーは続けた。

「いいかね」と、ピートは脅すような声で言った、「いざこざはご免だぜ」

ジミーはやおら首をちよつと傾けて身を乗り出すと、野獣のように吠えた。

「なんだ？ 俺たちに因縁つけるつもりなのか？ おい、どうなんだよ？」

ピートの表情がたちまち険悪になった。彼はジミーを鋭く睨みつけた。

「それじゃあ、お前と俺のどっちがましかやってもいいんだぞ」と、彼は声を荒らげて言った。

一見の客は物静かにドアの方へ歩いて行つた。ジミーはやる気満々で身構えた。

「俺を青二才と間違えるな。お前が俺と勝負するつてことは

だな、このニューヨークで一番強い人間と勝負するってことだぞ。分かってんのか？ 俺は、ちよとした暴れん坊なんだ、そうだな、ピリー？」

「そうだとも、お前はね」と、ピリーは自信ありげに相槌を打った。

「なんだ？ うるせえぞ」ピートは軽くあしらった、「お前らなどくたばってしまえ」

二人の男はまたもや笑い出した。

「あいつは、何言ってるんだよ？」と、ピリーが叫んだ。

「そんなこと、俺が知るかってんだ」

ジミーは大げさにピートを見やりながら答えた。

ピートは憤怒の身振りをした。

「さあ、ここから出て行くんだ。いざこざはゴメンだな。判ったか？ お前たちはけんかを売りたいのか？ それほどうのならばそのけんか買ってもいいんだぜ。お前たちなど、問題じゃないんだ！ いいか？ 俺はな、お前たちが見も知らない野郎だって打ちのめすことができるんだ。本当だぞ！ いいか？ 俺のこと甘く見るなよな、そうでないよ、往来へ放り出されて、『なんで、俺たちはこんなところへ来たんだ？』って、後悔することになるぞ。俺がこのカウンターを飛び越した途端、お前たちは往来へ放りっぱなされることになるんだ。それでもいいのか？」

「なんだよ？ ふざけるな！」と、二人は声を合わせて叫んだ。

ピートの眼がアメリカ・ライオンのように爛々と光った。「俺は本気なんだ！ 判ってるんだな？」

彼はカウンターの端の通路から出てくると、二人の前に立ちほだかつて肩を怒らせた。ジミーとピリーも素早く前へ踏み込むとピートに詰め寄った。彼らは三羽の雄鶏のように毛を逆立てて向かい合った。三人とも戦いの姿勢で頭を二振りすると両肩に力を入れた。三人三様、口のあたりの鋭敏な筋肉が、無理に薄笑いを浮かべようとしてねじれた。

「おい、俺をどうしようっていうんだ？」と、言うど、ジミーは唇を噛んだ。

ピートは用心してちよつと退き、手を左右に動かして二人が近寄ってくるのを防いだ。

「さあ、言うんだよ、どうしようってんだよ？」ピリーが繰り返した。二人はピートをなじつたり横目を使ったりしながら、迫った。彼らはまず最初にピートに殴らせようとした。

「さあ、後ろへ下がるんだ！ 俺に近寄るんじゃねえ」と、ピートは険しげな目で睨みつけて言った。すぐさまジミーとピリーはピートに向かって罵った。

「なんだって？ 大きな顔をしやがって！」

三人の男たちは睨み合い、小競り合いをしながら、少しずつ立ち位置を移動した。それはあたかも、駆逐艦が優位な位置を目指して作戦行動を取るのに似ていた。

「おい、どうして、俺たちを放り出さないんだよ？」と、二人はせせら笑いながらピートを煽った。

男たちの顔にはブルドックのような猛々しさが満面に現れていた。ぐっと握り締めた拳が待つてましたとばかりに突き出される。ジミーたちがピートの両脇を押さえつけ、殺気立った表情で睨みつけて壁の方に押しつけていった。

突然、ピートがカッとなって二人に罵声を浴びせかけた。

ピートの眼に「やるぞ！」という戦いの火花が光った。彼はさっと身を引いてジミーの顔に稲妻のような一発を見舞った。片足を大きく一歩踏み出し、身体的全重量をその一撃にかけたのだ。

ジミーは、バウワリー式に、したたかだった。猫のようにすばやく、さっと頭を下げてかわした。ジミーとピリーの痛烈な反撃の拳骨が屈んだピートの頭に炸裂した。

一見の客の姿は既にいなかった。

荒くれ者たちの腕が殺竿のように宙を舞った。はじめは炎のように怒りで赤く火照っていた三人の男たちの顔が、今や血の気が去って、戦場で白兵戦を演じる兵士の顔のように青白くなっている。唇を内に丸め固く歯を食いしばっているの

で、彼らの顔は妖怪が笑っているように見えた。

食いしばった白い歯の間からかすれたような罵り声飛び出して来る。彼らの眼は暗殺者のようにギラギラと光を放っていた。誰もが少し頭を低めて、素早く腕を振り回した。彼らが立ち回るたびに床の上の砂を踏み散らし、その度に砂がキュッキュツという音を立てて飛び散った。殴られるたびに男たちの青白い皮膚に真紅の痣が生じた。

十五分ほど時間が経つと、行き交った罵り声と罵声が途切れはじめた。彼らの口から吐息が漏れ出てきた。男たちの胸がみんな激しく上下していた。

ピートは苦しげにヒューヒューと小刻みに息遣いをしていて、それはまるで人殺しの声音のようだった。ピリーは手負いの狂人のように喚き散らした。ジミーは何も言わず自分を犠牲にする牧師のような気持ちで立ち回りを演じた。しかし、殴り合う三人の瞳には恐怖からくる怒りが現れていた。

ピートは危機一髪の差でピリーに一撃を加え、床に叩きつけた。彼はよろよろと立ち上がり、一見の客がカウンタールに残していったグラスを掴むとピートの頭をめがけて投げつけた。

グラスは壁の上部に当たって爆弾のように飛び散り、あらゆる方向に破片が飛び散った。三人が三人とも手直にあるものを手にとった。投げつけるものなどないように思われたが、突如としてグラスやビンが唸りを上げて飛び交った。動き回る頭に向かつてものが飛んでいく。今までは誰の手にも触れられることのなかったあのピラミッド型に積まれたグラスの山も、重たいビンが当たると、滝のように崩れ落ちた。鏡も例外ではなかった。

口から泡をふかして争う三人の男たちは血を求めて立ち回りを演じた。近くにあるものを投げつけ合い拳骨が飛び交っているとき、なにか祈りのような声―多分死を招くような祈りの言葉が聞こえてきた。

さっきの一見の客は、歩道にド派手に大の字になって倒れていた。酒場の周囲には笑い声がこだましていた。

「ひとり投げ出されたぞ」

通りがかりの人々が、酒場の窓が叩き割られたり足を引きずる音を聞きつけて集まってきた。なかには身をかがめてドアから中を覗く者もいた。見物人の数は次第に増えていった。中では依然として三人が争っていた。すると、一人の警官が走ってきて酒場の中に入ってしまった。群衆は興味津々で背をかがめてドアの隙間から中を覗き込んだ。

ジミーが、近づいてくる警官に気がついた。彼は立ち上がると警官に対して敬意を表した。それは彼がトラックに乗っているときに消防車に対する敬意の表し方と同じだった。彼は大声を上げながら横のドアに向かって駆け出した。

警官は警棒を振り回しながら突進してきた。彼は警棒をひくと振りして、ビリーを床に転がし、ピートを片隅に押しやった。彼は空いた手でさつとジミーの上着の袖をつかもうとした。彼はそこでちよつと息をついで体制を整えた。

「おい、おい、お前たちは一体何をしてるんだ？」警官が大声で怒鳴った。

ジミーは顔中血だらけだったが、寄ってくる物見高い群衆の手を払い除けて横丁へと立ち去った。彼は安全を確かめると立ち止まって建物の陰から振り返って見た。

警官とビリーとピートが酒場から出てきた。ピートはドアを施錠すると、大通りを歩いていく警官とビリーのあとを追

った。群衆は彼らを取り囲んで一緒に歩いた。

初めのうちジミーはまだ喧嘩の熱気が収まらず、心臓も高鳴っていた。思い切つてビリーを助けに行こうとしたが、一瞬思いとどまった。

「何だ？ そんなことをして何になるんだよ？」と、彼は自分自身に問いかけた。

(未完)